

麻布学園創立120周年記念「連続教養講座」

第5回 映画と文学

映画と文学を語っていただくのに適任のお二人にご登場いただきます。

日時:2014年6月21日(土) 会場:麻布学園講堂

(13:00開場 13:30開始)

入場無料です。学園関係者に限らずどなたでもご参加いただけます。

講演・対談者



かわもと さぶろう
川本 三郎 氏

文学、映画、都市など、幅広い分野での評論活動をなさり、『大正幻影』(1990年刊)でのサントリー学芸賞のほか、読売文学賞・評論・伝記賞、毎日出版文化賞、伊藤整文学賞(評論部門)を受賞されています。麻布学園1963年卒(同期には、理事長の清水慶三郎氏、前校長の氷上信廣氏がいらっしゃいます)。東京大学法学部卒。



こうの けんすけ
紅野 謙介 氏

日本大学文理学部教授。『検閲と文学』(2009年刊)でやまなし文学賞を受賞されるなど、ご専門の日本近代文学研究でご活躍されているとともに、学生時代にはシネマ研究会に属し、映画にも大変造詣の深い方です。1981年4月から1987年3月まで、本校の国語科専任教諭を務められました。早稲田大学大学院文学研究科博士課程満期中退。

紅野謙介氏よりのメッセージ

麻布につとめていたとき、視聴覚担当の教員として学期に一回、映画会を開催しました。まだVHSもDVDもない時代ですから、16ミリフィルムの映写技師の免許をとって、フィルムを借りての上映会でした。パゾリーニやキューブリック、土本典昭など、数多くの劇映画、記録映画を生徒たちと見た記憶があります。なかでも、「スパルタカス」の上映でいまは亡き玉井裕先生(世界史)に案内文を書いてもらったのも、なつかしい思い出の一コマです。そして森田芳光(彼もすでに故人となった)の「家族ゲーム」を上映したときに、あわせて講演をしていたのが川本三郎さんでした。あれからおよそ30年。今回、川本さんと久しぶりにお目にかかり、映画と文学について一緒に話をすることとなりました。

映画と文学は、映像と言葉という異なる素材をもとに作られます。したがって、簡単に比較できないし、「文芸映画」という言い方があるとしても、果たしてそれをジャンルと言えるかどうかはかなり怪しい。けれども、文学が映画に多くのインスピレーションを与えたことは確かです。映画が登場してから文学もその力にふれて少しずつ変化をとうげました。20世紀に大きく成長した魅力的なふたつの表現がどのように交差したかを、川本さんとともにたどってみたいと思います。

*「連続教養講座」についての追加情報は、学園のホームページ(<http://www.azabu-jh.ed.jp/>)の120周年記念行事のページでご確認ください。
麻布学園創立120周年記念 文化行事委員会